

とくいく「禅語」五

悟れば好悪なし（さとればこうおなし）

お釈迦様（ブツダ）は、弟子から「悟った人物とそうでない人物の違い」はどこにあるのでしょうかと質問されて、弓の矢を用いた喩え話をされたことがありました。悟った者は、第一の矢を受けても第二の矢は受けない。しかし、悟っていない者は、第一の矢を受けた後に、すぐに第二の矢を受けてしまう。それが、「第一の矢と第二の矢」の話です。

現代風に例えると、美味しい料理を食べたとします。その時に抱く「美味しい」という感覚は、悟っている人も悟っていない人も、どちらも等しく「美味しい」と感じます。これが料理から放たれた「第一の矢」を受けての感想です。同じように、道端の花を見つけた時「きれいだな」と思うことも、車の運転をしていて、急に横から割り込みしてくる車に「危ない」と思うものも第一の矢です。そのように一次的な思いは全て「第一の矢」であり、この矢は悟っている者いない者にも変わりなく心に突き刺さります。

その一次的な思いは、人が生きて行く上で不可欠であり、不可避な感情です。これをなくすことはできません。問題は、「第二の矢」です。美味しい料理を食べると、人は往々にしてもっと食べたいという思いを抱きます。あるいは、きれいな花が咲いていれば、摘み取り家に持ち帰って花瓶に活かしてみたいとか、割り込む車には文句を言ったり怒りの感情を抱いたりする。そういう二次的な思いが、第二の矢です。

そして二つの矢の違いは、ずばり矢が放たれ飛んでくる場所です。

- ・第一の矢は、心の外から放たれ飛んでくる
- ・第二の矢は、心の内から放たれ飛んでくる

外から飛んできた矢を受けて心が動き、その心が動くことで自分の心から第二の矢が放たれ、自分で放った矢が自分に突き刺さってしまう。

つまり、第一の矢を受けて、それについての「好き嫌い、良し悪し、是か非か」という執着を起こすことで、第二の矢が放たれるということを示しています。

料理を食べた一次的な思いについて、好き嫌いをいうことや満腹になるまで食べる。きれいな花を摘み取り過ぎて無駄にする。割り込みする車の是非、善悪を思い（怒り）、そこから第二の矢が放たれる。

その「第二の矢」は、良いことであれ悪いことであれ、あくまでも自分本位の「執着心」から放たれる矢です。自分の内側から放たれる第一の矢を受けて、さらに、その第二の矢を放つかどうかは、それが悟った者と、そうでない者の違いなのだということを、お釈迦様は説かれました。

また、そうした思い、感情を生じさせる元になるのは「三大煩悩（さんだいぼんのう）」と呼ばれる「三毒」です。

○食欲（欲望・非常に欲深いこと）

○瞋恚（怒り恨むこと）

○愚痴（道理にくらく心が迷うこと）」

この三毒は、人間の誰しもが持っている受（感受作用）から生まれてきます。

「悟れば好悪なし」、心の安心を得るためには、「第二の矢」の元となる「三毒」に気をつけて生活することが、とても大切なことなのです。